

動物病院におけるカウンセラーの役割～事例から

中森あづさ Azusa NAKAMORI<sup>1)</sup>、稲富正治 Masaharu INADOMI<sup>2)</sup>、深澤依里 Eri FUKAZAWA<sup>3)</sup>、小林哲也 Testuya KOBAYASHI<sup>3)</sup>

1)日本小動物医療センター：〒359-0003 埼玉県所沢市中富南 2-27-4 TEL:04-2943-8699  
FAX:04-2943-8698

2)川崎幸クリニック：〒212-0016 神奈川県川崎市幸区南幸町 1-27-1 Tel:044-544-1020  
FAX:044-544-4700

3)日本小動物医療センター附属がんセンター：〒359-0003 埼玉県所沢市中富南 2-27-4  
TEL:04-2943-8699 FAX:04-2943-8698

英文タイトル

What can a counselor do in a veterinary small animal practice ?

人の医療では、総合病院を中心に患者やその家族、また医療スタッフを対象とする心理相談室の設置が進められている。しかし、獣医療においては、二次診療施設の充実は図られてはいるものの、患者の家族の精神的サポートについて配慮される機会は非常に乏しいものである。演者は、日本小動物医療センターにおいてカウンセラーとして勤務し、様々な家族と接しながら、獣医師と家族の繋ぎ役を担っている。この2年間で出会った事例の中から2事例をとりあげ、動物病院におけるカウンセラーの役割とはどのようなものであり、またどのような影響を与えうるものかについて考えてみたい。

キーワード：カウンセラー、家族、精神的負担

## はじめに

主治医の紹介により、日本小動物医療センターのような二次診療施設に来院する家族は、強い不安を抱えていることが多く、また、疾患も重篤なケースがほとんどであることから、家族の精神的負担、経済的負担は大きなものとなる。演者は、2008年より日本小動物医療センター（以下、当院）にカウンセラーとして勤務し、特に附属がんセンターに来院する家族の心のケアに数多く関わってきた。そこで、ここ2年間で関わった家族の中から、事例1：転院を希望した家族、事例2：安楽死を選択した家族、の2事例をとりあげ、動物病院におけるカウンセラーの役割について考えてみたい。

## 当院におけるカウンセリングの手順

カウンセリングとは、精神科・心療内科などで行われるように特別な空間や時間を作り、そこで行われる1対1の心理相談が基本となるが、人の医療においては緩和ケア、救急医

療などのように場面設定が定まらないところでの会話も心理相談の1つとされる。獣医療においても、不安や悩みを持つ家族に対し、必要とされる場所（例えば待合室）や時間（診察来院時など）での会話もカウンセリングの範疇と考えて良いであろう。

そこで、初めに演者（以下カウンセラー：Co）が当院にて行っているカウンセリングの手順を示す。なお、当院は完全予約制であるために、Coは前もってその症例の依頼書（紹介状）に目を通すようにしている。

まず初診の家族に対しては、その不安の軽減を図るために以下のような対応を行う。

1. 当院のシステムについて説明する。
2. 待合室での様子を観察し、必要に応じて声をかけ、時には、今後の関わりが円滑に進むようコミュニケーションを図り、また会話を交わすことで不安な時間を少しでも楽に過ごせるよう配慮する。
3. 担当獣医師およびがんセンター長の診察後、内容の理解の確認とともに見積書についての再確認を行ったうえで検査・処置等の同意書の提示をし、承諾を得る。

そして再診の場合には、担当獣医師からの申し入れや家族からの声かけ、Co自身の判断によって、診察室、待合室、駐車場など、臨機応変に傾聴およびその対応を心がける。

#### **事例<パグ、7歳、雌>の家族 Rさん**

50代女性、小柄でやせ形、しゃきしゃきし、はっきり話す。感情表現（特に負の感情）が豊かであり、また自分のそういった性格を自覚している。家族も理解している様子。

背景：以前飼っていたパグを脳炎で1歳4カ月の若齢で亡くしている。その際うつ状態に陥り、心配した家族は同じブリーダーから現在のパグを購入、「丈夫な犬を」と希望したとのこと。

治療経過：主治医のもとで肥満細胞腫と診断され右前肢第4指断指。不完全切除で、また他の部位にも腫瘍がみられるとのことで当院がんセンターを紹介来院。多発性皮膚肥満細胞腫であり、以後、手術が実施された。

①術後癒合不全による2回の再縫合の必要性、②経済的不安、③公共交通機関を使って2時間という通院の負担、③担当医の海外出張による不在、④再発の不安などが重なり、3度目の縫合手術翌日、電話にて「転院したいので退院させたい」との申し入れがあった。そこで、来院時間に合わせてCoが待機し、待合室にて話を聴いた。話がひと段落ついたところで、さらにセンター長と担当獣医師が診察室にて、現時点で治療を中断することの危険性と治療継続の必要性について、時間をかけて説明した。その後、Rさんは入院継続を受け入れ、通院による化学療法も1サイクル（8回）続け、当院にての治療を初診から4カ月間継続した。

考察：本事例では、さまざまな要因が重なり、当院への不信感とともに通院の辛さなどから、転院の申し出があったにもかかわらず、考え直し、結局外科治療を終えて、化学療法1サイクルも終了した。その理由として、転院まで望むようになってしまった家族の話をじっくり聴く機会を設けたこと、対応の不手際をお詫びするとともに、担当獣医師、センタ

一長そろって今ここで治療を中断することの危険性などについて改めて時間をかけて話をしたことが、治療継続へとつながっていったものと思われる。

## 事例 2 : <雑種猫、10 歳、雄>の家族 N さん

30 代女性、小柄、細身、スポーティな服装が多い、仕事あり（内容不明）。夫 30 代、ホテル勤務、夜勤が多くすれ違いの日々。仕事の都合により、N さんかもしくは夫が患者を連れて来院。

背景：患者は主治医のもとですでに口腔内の扁平上皮癌と診断済み。同居猫（雑種猫、4 歳）あり。患者は、N さんが独身時代から共に暮らしていた猫であり、同居猫は夫が暮らしていたもの。

経過：初診時の N さんの印象は、表情が固く、拒絶的な感じであり、そのため、一通りの手順の説明にとどまった。2 カ月後、待合室にて N さんより「お墓などを紹介してくれるのか？」と声をかけられる。「そろそろ覚悟を決めない」と涙ぐむ。さらに 2 カ月を経過したころより、担当獣医師より「支えになってあげて欲しい」と声がかかる。患者は右眼があけられないほど顔が変形してきており、N さんは「見ているほうがつらい」と語る。読書が好きとのことから、動物の死をどう受け止めていったらよいかといった内容の本を貸す。以後、安楽死について積極的に語り始める。

初診から約 5 カ月、N さんのみ来院し院内で安楽死。1 週間後、「お世話になりました」と担当獣医師、センター長らへの挨拶のために夫婦で来院。

考察：患者は口腔内の扁平上皮癌であり、病状の進行に伴って顔の変形がみられるなど、看病する家族の精神的なストレスは非常に強いものとなる。胃瘻チューブ設置により、かなりの症例で QOL を維持しながら長期間生存できるようにはなっているが、だからこそ家族の負担は増えている面について、獣医療関係者は考えておく必要がある。

また、わが国では、欧米に比べ、安楽死を選択する家族が少ないこと、また安楽死を決断するまでに非常に時間がかかるケースが多い。本例では本を媒介にして死を受け入れる準備が進み、安楽死への決断へとつながったと思われる。家族を見極めたうえで、死の準備につながる書籍などを提示するのも、治療方針の決断への手助けになるであろう。

## 考察

人の医療、特に総合病院においては、患者本人だけでなく家族や医療スタッフの必要に応じて心理社会的援助を行う相談室などの設置が進められている。しかし獣医療においては、動物を亡くした家族を対象とするペットロスカウンセラーやグループミーティングなどが実施されるようになってきてはいるものの、そこに至る前の、罹患動物の看護に明け暮れる家族の精神的なケアについては置き去りにされていた感がある。特に最先端の獣医療を提供する二次診療施設においては、高額な治療費を払い、日常の看病の一切を負う家族への配慮が求められることは明らかである。なお、米国においては、1982 年にニューヨークのアニマル・メディカル・センターにスーザン・コーヘン氏が、ソーシャルワーカーとして勤務し始めたことが、獣医療における家族ケアのスタートであると考えられており、

その後米国内では Co の知る限りでもフィラデルフィア大学、コロラド州立大学などの大学附属動物病院において、ソーシャルワーカーが勤務している。

また一次診療施設、いわゆる一般の動物病院においては、家族とのコミュニケーションエラーによる転院、訴訟などの問題が目立つようになってきている。Co のような獣医師と家族の繋ぎ役がない施設であればあるほど、獣医師やスタッフのコミュニケーション能力が問われることになる。現在、医学、歯学、薬学においては医療面接を授業に取り入れ、OSCE（客観的臨床能力試験）も実施されているが、獣医学においても同様の取り組みが必要であることを強く感じている。

演者（校正者）連絡先

中森あづさ tel/fax:0422-23-1854,E-mail:ex-cure-corp@kph.biglobe.ne.jp